

## 読書が子どもの発達に及ぼす影響

アンドリュー・デュアー

### 要旨

読書が子どもの発達に大きな影響を与えているが、多くの読書に関する研究ではその効果の根拠は明らかにされていない。本研究では、読書が語彙や語学力、学力、想像力と性格の発達、感性、社会性、そして精神衛生にもたらす影響などの様々な面からのエビデンス評価を行い、読書が子どもの発達に与える影響について考察する。

### Summary

It is generally understood that reading is an important part of child development, but much research on the topic treats the benefits of reading as a given, and fails to discuss the mechanisms behind those benefits. This paper examines the effects of reading on children's vocabulary and linguistic development, academic performance, the development of the imagination, emotional and social awareness, and mental health, and discusses the mechanisms driving these benefits.

### はじめに

趣味としての読書のイメージは非常によく、本を読むことは学校などで子どもに無条件に勧められる活動の一つである。本をたくさん読む子どもは勉強ができ、健全な生活を営んでいると思われ、生きる力を評価する一つの指標のようにも受け止められている。したがって、子どもの読書を推進する団体も多く、読み聞かせなどを促進する本が次々と出版されている。

本を読むことによって多くの効果が生まれるともいわれている。期待できるとされている主な効果を挙げれば、①子どもの語彙が大幅に増える。②言葉と読解力が発達する。③学力が高まる。④想像力と集中力が鍛えられる。⑤性格が形成される。⑥感情や感性が発達する。⑦社会性が発達する。⑧人の気持ちが読める共感性が成熟する。⑨文脈理解力が鍛えられる。⑩経験の拡張ができる。⑪悩みを解消する力が身につく。⑫進路のヒントが得られる。⑬親などとのきずなが深まる。⑭時間を楽しく過ごすなど、実に多様である。

多くの司書と教育者はこれら読書の必要性の裏付けとして、主観的な理由を挙げることが多い。たとえば、学力と書く力の向上や想像力の発達が、読むことによって自ずと生み出される、という断片的な説明である。多くの読書論たるものは著者の個人的な読書経験に基づいている人生論のようなものであって、心理学の原理による体系的な理論ではない。

実際問題として、読書と学力などの因果関係をはっき

りと示すことが非常に困難である。たとえば、読者と不読者の学力を比較する研究では、統計上では学力と読書量が比例していることがわかっていても、個人の推移を長時間にわたる縦断的調査で調べない限り、個人の読書がその人の学力を伸ばす要因であることを断定できない。また、学力の高い人だからこそ読書が好きだという見方も否定できない。言い換えれば、不読者が本を読み始めると学力が上がることは感覚的に期待できても、横断的調査だけでは証明できないし、バイアスも多い。このように読書の量および好みの度合いだけでは、読書の効果が証明することが難しい。

そこで本研究では、読書心理学の見識と PISA 学力調査の統計データなどを中心に、読書が語彙や語学力、学力、想像力と性格の発達、感性、社会性、そして精神衛生にもたらす影響などの様々な面からのエビデンス評価を行い、読書が子どもの発達に与える影響について考察する。

### ① 語彙

Cunningham らの研究 (1) では、英単語を頻度順に並べた表を用いてさまざまな英語の読み物を分析し、読者はどれくらい珍しい単語に触れるか調査をした。たとえば、幼児向けの本の単語ランキングの平均値は 627 であり、新聞は 1690、科学論文の要旨は 4389 であった。日常会話とテレビの単語ランキングの平均値は 400 ～ 600 の間となっている。したがって、会話とテレビにしか触れない子どもは珍しい単語にめったに出会わず、児

童書を読むのに必要な語彙にさえ触れていないことになる。もちろん、触れていない単語を習えないので、語彙は増えない。本を読めば読むほど、より多くの単語に出会い、語彙を増やす機会に恵まれる。

アメリカの National Endowment for the Arts の研究報告では、家庭にある本の数と学力調査の成績が比例していることを示している（2）。本の多い家庭で育った子どもは、テストの点数は比較的に高い。その差の原因として、本のある家庭では、子どもはより多くの言葉に出会うチャンスがあるからだと思われる。逆に、本のない家庭の子どもは語彙を延ばす機会に欠けている。脳科学者のメリアン・ウルフは「本がまったく手に入らないとなると、この幼児期に習得していなければならぬはずの単語の知識と世界に関する知識に壊滅的な影響がおよぶ」ことを主張している（3）。もちろん、家にある本を読まなければ効果は生まれないが、統計によれば本の存在と高い学力は優位に関係している。

さらに、学校での授業は語学力に依存しているため、子どもが就学するまでに語彙を増やさないと、学習に影響が出る。ウルフによれば、「語彙発達とその後の読解力とが相関しているために、幼児期の語彙増加の後れは、不運な一事象としてとらえられた場合に思われるより、はるかに不吉な前兆である。」（4）その後れを取り戻すのは大変難しい、とウルフや McCain などのデータは示している。しかし、まったく読まない小学生に比べて、毎日 25 分ほど本を読んでいる子どもは一年間で 200 万語ほど多く読むことになる。幼児期の読書は類似する。したがって、読書習慣の早期取得で語彙発達の後れを避けることができると推察される。

## ② 言葉の発達・読解力

日常会話やテレビ鑑賞だけでは、子どもは口語にしか出会わない。会話とテレビ番組で使われている語彙が少ないだけでなく、表現の構造も比較的に単調である。しかし、本では、会話にはめったに出てこない文学的あるいは詩的表現が豊富に存在している。それに触れている子どもはより複雑な文章の構成を理解でき、豊かな表現も類推的イメージも使いこなせるようになる。これはさらに思考力と発想力につながっていく。

ウルフは文学的表現の使い方の研究について述べている。読み聞かせを 2 年間頻繁に受けた子どもと受けていない子どもに話を創作するタスクをさせた。それぞれ個人的な出来事の話させ、また人形に絵本を読み上げるふりをさせて、使った語彙と表現を分析した。すると、読み聞かせを受けた群は文学的な表現を多用し、「洗

練された統語形式や長い言い回し、関係詞節まで使って見せた」（5）。読み聞かせがなかった群では、これらの表現はほとんど見られなかったため、文学的な単語と表現は日常会話から習う可能性は低いものであることがわかった。

さらに、頻繁に読書している子どもは類推的な表現と思考を覚える。絵本とおとぎ話には類をバラにたとえたり髪を絹にたとえたりする比較を要求する表現があり、子どもは話を理解するために、その構造を解けなければならない。「このプロセスで、子どもたちは語彙スキルを獲得するだけでなく、認知的に複雑な類推の使い方も身につける。類推スキルは、年齢を問わず、ほとんど表面に現れないが、きわめて重要な知能の発達の一側面である。」（6）しかし、類推的な表現は日常会話でめったに使われていないので、読書でしか取得できない。

読書心理学者の阪本一郎は、「読む能力の学習の効果は、もっと広い（書く・聞く・話すをふくむ）言語の能力の発達に転移する」（7）と主張している。読み聞かせと読書は子どもに会話だけで得られない表現と語彙を多く提供し、コミュニケーション能力を向上させる。

経済協力開発機構（OECD）による国際学習到達度調査（PISA）は、参加国の 15 歳の学生の数学的能力と読解力を測定し、分析している。さらに学生の読書傾向や家庭事情などについても調べているので、個人的な読書環境と読書量を成績と比較することが可能である。

その結果、小説またはノンフィクションの本を月数回あるいは週数回読んだ学生は読解力の試験で高成績を得る率が特に高かった（8）、ということがわかった。しかも、その差は平均して 1.5 学年ほどのものであることから、読書の効果が鮮明に表れている。

しかし逆に、不読者は読むのに慣れていないため、突然の読解力のテストで読むだけで力が尽き、分析するまで余裕がない。「Lack of exposure and practice on the part of the less-skilled reader delays the development of automaticity and speed at the word recognition level. Slow, capacity-draining word recognition processes require cognitive resources that should be allocated to comprehension. Thus, reading for meaning is hindered…」（9）多くのエネルギーを単語の認知と解説に費やし、意味の理解に必要な余裕を持っていないので、読解力が落ちることが報告されている。

簡単に言えば、読解力の成績は練習の成果である。読解力を上げるには、頻繁に読書をし、語彙と表現力を上げることが効果的である。

### ③ 学力

学ぶ力を上げるには、読書で鍛えた語学力の土台に本から得た世界の知識を重ねていくことが有効である。カナダの教育学者である McCain と Mustard の調査によれば、幼児期の読み聞かせは脳に強力な刺激を与え、将来の学習に必要な発達の土台を築く (10)。また、幼児期の語彙と行動は「readiness to learn」の指標となり、学校での学力、算数の成績、そして非行傾向などの目安となる (11)。

PISA の 2009 年の調査は McCain らの結果を裏付けている。幼児期にほぼ毎日、あるいは週数回の読み聞かせ体験があった 15 歳児の成績は、めったに読み聞かせがなかった生徒に比べて 25 点高く、すなわち 0.5 学年相当の差があった。同じ家庭経済レベルの生徒を縦断的に比較しても、14 点ほどの差があり、読み聞かせの要因としての学力への効果を表している (12)。

幼児期に限らず、15 歳になってもなお読書している子どもたちは PISA のスコアを大きく引き伸ばしている。スコアの低い生徒と高い生徒を比較すると、決定的な違いとして、好んで読書しているか否かという要因が浮上した。ほぼ毎日、趣味として読書している生徒は、しない生徒より 1.5 学年に相当する差がついていた。この学力の差は大人になっても依然として大きい。「Students who are highly engaged in a wide range of reading activities are more likely than other students to be effective learners and to perform well at school. Research also documents a strong link between reading practices, motivation and proficiency among adults.」(13)

多読するだけでは学力は伸びない。むしろ、学習の習慣をよく理解していないまま本をたくさん読んでも、読解力が劣れることもある。したがって、効果的な読む習慣を身につける必要がある (14)。しかし、読書を幼児期から親子で始めれば、効果的な読書スキルは簡単に取得できる。さらに Cunningham らの研究によれば、読書が幼児期の早い段階から始まり、長く続けている子どもの場合、先天的な知力が多少低くても、読書で得た語彙と一般知識は知力を補え、学力を高める。すなわち、読むことによって、子どもの頭がよくなる (15)。

また、脳の学習するための準備として、読書することが効果的であることは天道らの研究で明らかとなっている。「音読が脳のウォーミングアップとなり、音読後に前頭前野の能力を向上させること（潜在能力を引き出すこと）が可能であることが示唆された。始業前や事前に読書活動をおこなわせることで、子どもたちの潜在能力

を引きだした状態で毎日の学習を進めることができると考えられる。」すなわち、朝の読書や、休憩時間での自由読書は子どもたちを落ち着かせ、学習にふさわしい姿勢を促進することに役立つ (16)。

### ④ 想像力

読書を推進する本の多くは、想像力についてしばしば触れている。読むことによって想像力が豊かになると主張する著者も少なくない。しかし想像力は非常に抽象的なものであり、尺度がないため、読書でどのように変化しているか、どの程度豊かになっているかなど、調査をすることが極めて困難である。

しかし、PISA の 2009 年の調査においては、小説でもノンフィクションでも読書をしている生徒の読解力のスコアを比較した。どちらにも不読者に比べ高い傾向が見られた。しかし、興味深いことに小説の読者はノンフィクションの読者より読解力のスコアがさらに高かった (17)。おそらく小説はノンフィクションより想像力を必要とするため、小説の読者は想像力が発達し、結果として読解力が高まったと推測できる。言語脳科学者である酒井邦嘉は、「本では、どうしても足りない情報を想像力で補うことによって、その人に合った、自然で個性的な技が磨かれたのだ。」(18)と表現している。

文章から人の動機や精神状態などを読み取るために、想像力を働かさなければならない。PISA などの読解力のテストにおいては、文章を読み、動機を聞いたり話の進行を予測させたりする質問内容が多いため、スコアを伸ばすために豊かな想像力、特に読書で鍛えられた想像力は必須であるといえよう。

文章は口語より複雑な構成を用いることが多い。文章を読むためには、多くの情報を吸い上げ、頭で整理する必要がある。これは集中力を必要とする作業である。

集中力は先天的ではなく、ADHD などの障害がない限り練習で鍛えることができる。しかし、現代社会では情報が散乱しており、噛みくだかれているため、長く集中する必要も機会も少なくなっている。ウルフは 2011 年のインタビューで次のように指摘している。多くの文学を教える教員は、学生が長い文章を読む忍耐力を持たなくなっていることを嘆いている。原因はオンライン情報の構造にあるという。「The hyperlinked, text-messaging screen shapes the mind quite differently than the book, according to Wolf. "It pulls attention with such rapidity it doesn't allow the kind of deep, focused attention that reading a book 10 years ago invited," she says. "It invites constant change of

attention, it invites multitasking. It invites, in other words, a kind of triage of attention.” (19) 画面上の小刻みの情報は目をあちらこちらへと引くため、脳は見るところの選択に多くのエネルギーを費やし、本が求めるような深い集中が生まれない。

ウルフは同じ記事でさらに、集中力の低下を危惧している。本の中身に集中して複雑なイメージと構成を解き、意味を読み取れない人は、はたして人生の複雑さに耐えられるのか。読書で鍛えた集中力を人生の様々な場面で応用できる。

## ⑤ 性格の形成

性格には先天的かつ普遍的な部分があるが、教育や経験によって性格が変わることもある。また、周囲の価値観に受ける影響で性格が形成されることもある。読書を通して読者は幅の広い疑似体験を経験し、また異なる価値観に気づかせられるので、性格が影響されることになる。

阪本はその過程について「文化的価値の体験はときに感動を呼ぶことがある。また文化的価値における洞察に関連して衝撃 (shock) を味わうことがある。このような激しい情緒的興奮は、読者のパースナリティを変革(あるいは異常な強化を)する。あるいはまた読者がなんらかの要求不満 (frustration) を懐いている場合、彼の心中にわだかまっている感情を浄化 (catharsis) したりするなど、その異常な緊張を健全な方法で処理する適応の規制がはたらく。このようにして読書は読者のパースナリティの形成に変革的な効果をもたらす。」(20) と述べている。

阪本がいう読書は絵本や小説のことを指しており、情報を体系的に紹介するノンフィクションの本は衝撃や情緒的興奮を起こさないため、すべての読書が性格に影響するわけではないとしている。しかし、絵本や小説は性格の箱庭にもなり、読者の鏡にもなるので、性格を自覚する材料にもなりうるのではないかと推測する。

## ⑥ 感情と感性の発達

自分の感情はともかく、他人の感情を正確に読み取り、適切に反応するには豊富な経験が必要である。子どもは幼児期に周囲の人を観察し、自分の行動に対する反応を見たりすることで、感情について学習する。しかし、日常生活の中で経験する感情の種類は限られているため、より幅広く感情を疑似体験するには、読み聞かせや読書が有効である。

ウルフは子どもが感情を物語から読み取る過程について「物語や本を通して、彼女はあらゆる感情を学び始め

ているのだ。物語と本は、彼女がそうした感情を自分自身でためてみるための安全な場所となる。だとすれば、彼女の発達にも大いに役立っているはずである。ここで作用するのは、情動の発達と読字の相違関係だ。幼い子どもたちは読むという行為に触れることによって新しい感情を体験することを学ぶ。それがひいては、より複雑な情動を理解するための心構えを与えてくれるわけだ。」(21) (注意：ウルフは男女差別的表現を避けるために、「彼女」と「彼」という代名詞を交互に使っている。)と述べている。

逆に、本を読まない人が感情に触れる体験はもっと狭い。National Endowment for the Arts の研究報告によれば、不読者は読まないことによって、幅広い感情や見方へのアクセスを放棄しており、自分の文章コミュニケーション能力の発達を妨げている (22)。

## ⑦ 社会性

子どもは周囲の人を観察し真似することを通して、文化や適切な習慣を覚えていく。最初は感情と同様、観察できる範囲が狭く、場合によって家族に限られていることもある。しかし、学校に通い、職場に入り、次第に社会に進出していくなかで、社会性を身につける必要性が高まる。読み聞かせや読書は幼児の世界を広げ、登場人物の感情や考え方に触れさせるため、社会の観察と理解を促す効果がある。

阪本によれば、本や物語は社会適応能力を養うことができる。「言語はパースナリティの社会的適応の道具である。(中略)したがって読書は、人間関係の安定、ひいては社会の一員としての生活の安定に寄与するのである。」(23) 子どもは読み聞かせと読書で得た経験を取り入れ、自分の生活で活かせるようになる。

さらに、「読書は、個人に文化的価値を体験させる効果がある。読書材料の多くは、そういう価値を担った内容を持っている。それを読むことによって、真偽・善悪・美醜等の価値判断の基準と能力とを与える。これらはわれわれの日常生活の中でも体験され、人格をみがきあげていくものであるが、読書はこれらを集約的に啓発する。」(24) つまり、社会性への王道があれば、それは読書である。本は幅広い体験を集中的に提供してくれる。多くの場合、登場人物の行動が引き起こす反応との因果関係が明確であるため、実生活より集約されている。

また、本をよく読む人は不読者より社会活動やボランティアを積極的にする傾向があるとの複数の研究報告がある。(25) これは本の影響なのか、それとも社会活動を好む人はそもそも読書をするのかの因果関係は交絡因



子ども多く不明であるが、本に登場する物語を読むことで、他者の立場を意識し理解するため、不読者より読者は社会のニーズに気づくことが多いと解釈できる。どちらにしても、不読者に比べると、本を読む人の社会性のレベルが明らかに違う。

## ⑧ 人の気持ちが読める共感力

子どもは周囲の人の感情と動機などに非常に敏感であるが、上述したように、日常生活では経験の範囲は狭くなりがちである。物語や本では、幅広い性格と立場の人に出会える。さらに、物語の流れでその人の考えていることや感情がどの結果に導くかなど、安全に観察することができる。

ウルフはその過程を次のように述べている。「この小児期に、人間が学ぶことのできる最も重要な社会的スキル、情動的スキルおよび認知スキルのひとつに数えられる、他人の考え方を受け入れる能力の基盤が形成される。(中略) どちらの物語も、大勢の幼い子どもたちがお話を聞かせてもらったり、本を読んでもらったりすることを通して体験する思考と感情のよい例だ。熱気球に乗って空を飛んだり、ウサギとの駆け比べに勝ったり、十二時の鐘が鳴るまで王子様と踊ったりすることは決してないだろうが、本の物語を通して、それがどんな感じをするものか知ることができる。このプロセスで、時間を気にせずに自分の殻から足を踏み出し、『他人』のことを理解し始める。」(26)

子どもは本を読まなくてもこの過程を経ることができが、経験の量と質はともに読書する子どもに劣ってしまうため、漏れと偏見が生まれる可能性は比較的に高い。

## ⑨ 文脈理解力

世の中には、異なる習慣や考え方が数多く混在している。それらを全部懐くことは不可能であるが、逆に自分と異なるものを排除する必要もない。相手の立場に立ち、文脈の中で理解することが可能であるが、幅広い視野が前提条件である。読書は視野を広げ、さまざまな習慣や考え方を文脈の中で紹介する。

たとえば、阪本は異なる価値観を持っている人の伝記を読むときの例を紹介している。「個人は、読書材料から生産した意味を、彼個人の自我の思うままに個性化してよいのである。たとえばいまここに乃木大将の伝記があるとして、大将の最期の殉死の意味を、当時の忠君体制の中に生きた軍人の生き方として客観的に理解することは重要であるが、その意味を自分の自我領域との接点内で捕えるときは、それをナンセンスと解しようと、尊

敬すべき行為と受け取ろうと、そのほかどのような意味に理解しようと、読む者の自由なのである。」(27) しかも、本を多く読むと、ほかの例と比較したりすることもできるようになり、非常に些細な文脈理解が可能になる。

不読者は文脈理解に必要な経験と語彙を身につけることが難しい。これは、「聞いたことや教わったことのない単語の数の問題というだけでは済まない。単語を聞いたことがなければ、概念を習得できない。統語の形式にめぐり会ったことがなければ、物語のなかの出来事の関係に関する知識が乏しい。物語の形式をまったく知らなければ、推論や予測の能力に欠ける。文化の伝統と他人の気持ちを経験したことがなければ、他の人々が感じていることを十分理解することができないのである。」(28) もちろん、文字のない文化では、語り部と物語はこの役割を果たしているが、口頭文化では物語の数が限られ、読書の幅広さゆえの効果にかなわない。

## ⑩ 経験の拡張

本の最大の目的は、著者の考えと経験を不特定多数の人に伝えることだと思われる。読むことによって、直接体験できないことを疑似体験できる。そうすることによって、読者は家にいながらも多様な経験を味わうことができる。

阪本いわく、これによって、「読書は個人の知的、経験的体制を豊かにする効果がある。ことに個人の現実の生活では、直接に経験できない特殊な情報をも、間接経験として際限なく個人に提供する。それによって個人のパースナリティの適応の範囲が、時間・空間を超越して拡大し、個人が現実と直面する適応障害においても、その問題を容易に解決する洞察の手がかりを準備させる。良い意味で『海千、山千』の人生経験の豊かな人物を作り、彼の現実の他の面での適応を健全に導くことになる。」(29)

## ⑪ 悩みを解消する力

若者の悩みの多くは、自分のアイデンティティに対する不安から生まれる。本は様々な性格の人とその生き方や悩みを紹介するため、読書する子どもは参考になる例を探ることができる。登場人物を観察したり共感したりすることによって、自分のアイデンティティを自覚できるようになる。

ロスらの研究では、次のように論じている。「読書は、我われが誰であり、世界で我々がいるところはどこで、どうなるのか、理解するのを助けてくれる。さらに自己同一性の土台は、さまざまな社会構造や社会的規制に関連して、その時どきに自己を理解することにある。読書

という文脈で架空の登場人物や世界と読者が作り出す関係は、多様で競合するアイデンティティを解釈する試みや探索を促進する。(中略) 他者や他の経験について読むという活動は、ヤングアダルト読者が自分自身や、世界で自分が占める位置の変化を理解する一助となる。」(30)

天道は気持ちを落ち着かせる『もとに戻れる』本について述べている。「ちょっとした争いごとや悩みごとがあっても、その『本』と向き合っていれば、それらの心の葛藤が自然にほぐれて、新しい明日を迎えることができるという『本』との出会いである。」(31) 様々な本を読んでいると、子どもはその癒しの効果にも気づき、のちに読書をすることによって自分の気分をコントロールできるようになる。

アメリカの学校教員組合の研究では、読書は次のような効果があると報告している。個人の読書とブッククラブ活動などは癒し効果があり、学習を支え、孤独を解消し、社会的地位をあげ、自信と自愛を高め、精神衛生をよくする。また、日ごろの悩みから逃避でき、ストレスを下げることも可能である。つまり、読書は安定した幸せな暮らしを営むために、大変有効な趣味である (32)。

## ⑫ 進路

読書は卒業後の進路にも影響するため、若いころの読書は重要な投資にもなる。たとえば、National Endowment for the Arts の調査では、読解力は進路に大きく影響することが明らかになった。企業は読む力と書く力を強く要求しているので、読書はいい仕事に導く可能性を控えている。「Greater academic, professional, and civic benefits associated with high levels of leisure reading and reading comprehension.」(33)

逆に、PISA の追跡調査のデータでは、15 歳の段階で読解力のスコアが低い生徒は、のちに比較的に低い賃金を得ており、しかも失業する可能性が比較的に高い (34)。

若いころで培った読書の技術で、語彙や語学力、学力、読解力、社会性などが鍛えられ、一生の糧となる。本を読む人の内的生活だけでなく、外的生活も豊かになれる。

## ⑬ 親子の絆 (読み聞かせの場合)

読み聞かせなど、ひざ元での読書や家読のような家族ぐるみの読書活動は親子の絆と関係するが、因果関係を証明することが困難である。しかし、読み聞かせなどは親子ふれあいの格好の機会であるため、上述した他の効果にも考慮すれば、やる価値が極めて高いことが言える。

## ⑭ 楽しみ

PISA のデータでは、楽しむために読書することは学力の向上と読解力の発達につながることがわかる。しかし同時に、娯楽のために読書する学生は年々少なくなっている。日本では、読書する割合がいくらか増える傾向にあるが、分母が最初から参加国の中で最も低い割合である。

天道いわく、「読書というものは、楽しみながら、前頭前野を鍛える効果もちあわせているという、ひじょうに優れた娯楽であると考えられる。」(35)

保護者と教員はこれからも、上述した効果を理解したうえで、積極的に読書を促進する必要がある。

## 結論

読書が学力や読解力に影響を及ぼすことは統計データで明らかである。読書で得た語彙が役立ち、本から読み取った感情の理解と疑似体験と組み合わせ、文章を理解する力につながっている。また、本は子どもの生活空間を大幅に広げ、日常生活の中で出会えない違う時代と場所の人や体験に触れることができる。この体験は疑似的であっても、実体験同様に子どもの社会性や感情的発達に寄与することが明らかになった。

これらのエビデンスから言えることは、読書は子どもの発達に良い影響を与えることが明らかである。

ところが、想像力の発達や性格の形成などに関して、エビデンスの評価が比較的に低く、読書という行為がどのぐらい発達に影響しているかの因果関係は交絡因子も多く不明であるため、さらに研究する必要がある。

## 参考文献

- 秋田喜代美 著、「読書の発達心理学;子どもの発達と読書環境」(東京:国土社、1998 年)
- 市毛勝雄 編、「学校図書館・読書活動の育て方」(東京:明治図書出版、2010 年)
- メアリー・アン・ウルフ 著、小松淳子 訳、「ブルーストとイカ ～ 読書は脳をどのように変えるのか?」(東京:インターシフト、2008 年)
- 太田克子、村田伸宏、「群馬・国語教育を語る会」 共著「読書の力; 国語授業と学校図書館との連携・協力」(東京:三省堂、2010 年)
- 河合隼雄、松居直、柳田邦男 共著、「絵本の力」(東京:岩波書店、2001 年)
- 国立教育政策研究所 編、「読書教育への招待」(東京:東洋館出版、2010 年)
- 酒井邦嘉 著、「脳を創る読書 ～ なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか」(東京:実業之日本社、2011 年)
- 阪本一郎 著、「現代の読書心理学」(東京:金子書房、1971 年)
- 三森ゆりか 著、「絵本で育てる情報分析力」(東京:一声社、2002 年)

- 吹田恭子 編著、「こどもの本の使いかた」(東京:ひとなる書房、2001年)
- 天道佐津子 編著、「読書と豊かな人間性の育成」(東京:青弓社、2005年)
- 林田鈴枝 著、「絵本と子育てのおいしい関係」(東京:解放出版、2007年)
- 水野小夜子 著、「読み聞かせて育つ生きる力」(大阪:フォーラム・A、2000年)
- キャサリン・シェルドリック・ロス、リン (E.F.) マッケクニー、ぼーれっと・M・ロスバウアー 共著、「読書と読者 ～ 読書、図書館、コミュニティについての研究成果」(京都:京都大学図書館情報学研究会、2009年)
- Barber, John, "Books vs. screens: Which should your kids be reading?" *The Globe and Mail*, Monday, Dec. 12 2011, last updated Thursday, Sep. 06 2012
- Cunningham, Anne E., and Stanovich, Keith E., "What Reading Does for the Mind," *American Educator*, Spring/Summer 1998, pp. 1-8
- Gleick, James, *The Information: A History, a Theory, a Flood*, New York: Vintage, 2012
- Gottschall, Jonathan, *The Storytelling Animal: How Stories Make Us Human*, New York: Houghton Mifflin Harcourt, 2012
- McCain, Margaret Norrie, and Mustard, J. Fraser, *Reversing the Real Brain Drain: Early Years Study Final Report*, April 1999
- Manguel, Alberto, *A History of Reading*, Toronto: Alfred A. Knopf, 1996
- National Endowment for the Arts, *To Read or Not to Read: A Question of National Consequence (Research Report #47)*, Washington: Office of Research & Analysis, National Endowment for the Arts, 2007
- National Union of Teachers, *Reading For Pleasure*, London: Strategy and Communications Department of The National Union of Teachers, 2010
- OECD, *PISA 2009 Results: Learning to Learn - Student Engagement, Strategies and Practices (Volume III)*, OECD, 2010(<http://dx.doi.org/10.1787/9789264083943-en>)
- OECD, *PISA 2009 Results: What Makes a School Successful? - Resources, Policies and Practices (Volume IV)*, OECD, 2010 (<http://dx.doi.org/10.1787/9789264091559-en>)
- OECD, "Do Students Today Read for Pleasure?" *PISA in Focus* 2011/8 (September), OECD, 2011
- OECD, *Reading for Change: Performance and Engagement Across Countries*, OECD, 2011
- OECD, "What Can Parents Do to Help Their Children Succeed in School?" *PISA in Focus* 2011/10 (November), OECD, 2011
- Ripley, Amanda, *The Smartest Kids in the World: and How They Got That Way*, New York: Simon & Schuster, 2013
- Young, Sherman, *The Book is Dead: Long Live the Book*, Sydney, Australia: University of New South Wales Press, 2007

## 引用

- (1) Cunningham, pp. 2-3.
- (2) National Endowment for the Arts, p. 12.
- (3) ウルフ、p. 156.
- (4) ウルフ、p. 156.
- (5) ウルフ、p. 134-5.
- (6) ウルフ、p. 135.
- (7) 阪本、p. 181.
- (8) OECD, *PISA 2009 Results, volume III: Learning to Learn*, p. 35.
- (9) Cunningham, p. 1.
- (10) McCain, p. 9.
- (11) McCain, p. 6.
- (12) OECD, "What Can Parents Do to Help Their Children Succeed in School?" p. 2.
- (13) OECD, "Do Students Today Read for Pleasure?" p. 2.
- (14) OECD, *PISA 2009 Results, volume III: Learning to Learn*, p. 98.
- (15) Cunningham, p. 7.
- (16) 天道、p. 63.
- (17) OECD, *PISA 2009 Results, volume III: Learning to Learn*, p. 35.
- (18) 酒井、p. 125.
- (19) Barber.
- (20) 阪本、p. 182.
- (21) ウルフ、p. 130.
- (22) National Endowment for the Arts, p. 55.
- (23) 阪本、p. 181.
- (24) 阪本、p. 181.
- (25) たとえば、National Endowment for the Arts, p. 90.
- (26) ウルフ、pp. 131-2.
- (27) 阪本、p. 180.
- (28) ウルフ、p. 154.
- (29) 阪本、p. 181.
- (30) ロス、p. 146.
- (31) 天道、p. 78.
- (32) National Union of Teachers, p. 5.
- (33) National Endowment for the Arts, p. 21.
- (34) OECD, *Reading for Change*, p. 3.
- (35) 天道、p. 64.